

乾しいたけと農協

主事研究員 若林剛志

本稿では、最近の乾しいたけの生産・流通の動向と乾しいたけを取り扱う専門農協の取組みについてみていきたい。

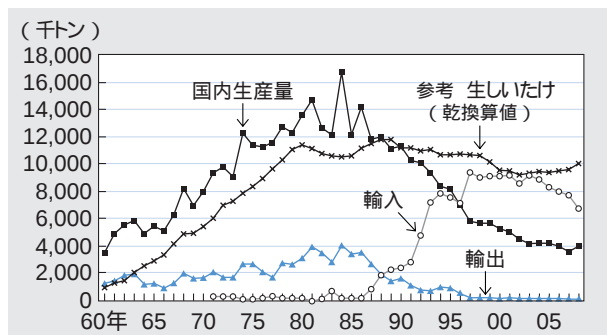
1 生産・価格および農家の収益動向

(1) 生産量・輸入量の推移

乾しいたけと生しいたけの国内生産量を比較したのが、第1図である。これをみると、88年までは生しいたけに比べ乾しいたけの生産量が多かったが、89年以降は生しいたけの生産量が乾しいたけを上回っている。この背景には施設を利用し、栽培期間が短縮できる菌床栽培の普及がある。なお、国内産乾しいたけは原木栽培である。

乾しいたけはかつて輸出農産物の中心的存在であったが、プラザ合意後の円高を経て輸出量が急減した。そして、08年の乾しいたけ生産量は3,867トンとピーク時の23%に減少している。これは中国からの輸入急増の影響が大きい。中国からの菌床栽培による乾しいたけは、国内産の乾しいたけの1/3から1/4の価格で販売されており、08年では乾しいたけの国内流通量の64%が中国産を含む輸入品となっている。

第1図 乾しいたけの生産と輸出入量(全国)



資料 農林水産省『特用林産物需給動態調査』
(注) 統計に生しいたけの乾換算値は掲載されていないが、乾しいたけを生換算した数値から逆算して求めた。

なお、乾しいたけの輸入量は近年減少している。この背景には、06年にポジティブリストが導入されたこと、原料原産地表示の徹底がなされたこと等があるとみられる。また、これらの制度導入に伴って国内産が一定の評価を受けるに至っており、減少傾向にあった国内生産も近年は横ばいが続き、08年ではわずかながら増加に転じた。

(2) 生産構造

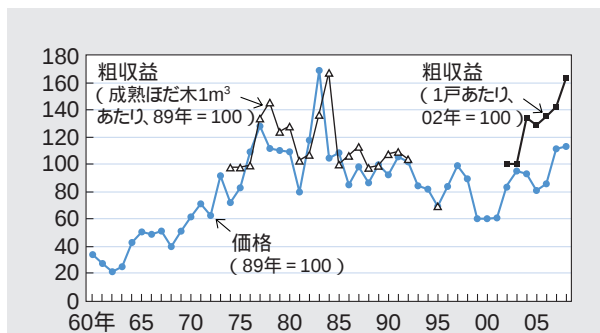
乾しいたけは価格変動が大きく、栽培に季節性があるため、生産者には兼業や複合経営者が多く、かつ経営規模は小さい。また、原木栽培であるため、山間部での栽培が中心であり、生産者の多くは高齢者である。そして、生産には玉切りのためにチェーンソーを使う等、危険度の高い作業も伴う。

しかし一方で、初期投資が少なく、生産物の重量が軽いことから、乾しいたけは高齢者でも比較的取り扱いやすい品目と考えられている。そのため、農家の高齢化が進む総合農協の一部では、奨励作物に組み入れる例もみられる。

(3) 価格・農家の収益動向

小規模な農家や林家により出荷された乾し

第2図 価格と粗収益の動向(全国)



資料 農林水産省『しいたけ生産費調査報告』(1974～95年)、『林業経営統計調査』(2002～08年)

いたけは、専門農協や全農等が開設している市場で取引され、価格が決まる。その価格は代替品である輸入乾しいたけの価格や輸入量からも影響を受ける。近年は輸入量の減少を受けて、国内産乾しいたけの価格が上昇しており、農家の粗収益も増加傾向にある（第2図）。

2 出荷と販売

次に乾しいたけの集荷等流通構造をみていく。

乾しいたけは特用林産物に区分される。林産物であり、森林組合も乾しいたけを取り扱っているが、第1表にみられるように、最も取扱量が多いのは農協であり全体の5割を占める。そして、そのなかでも専門農協の取扱いが最も多く、全体の25.5%を占めることが注目される。なお、日持ちするという乾しいたけの特徴から、生産者による直販も14.8%を占め、近年そのウェイトは高まっている。

専門農協は特定県に集中しており、乾しいたけ生産の全国シェアが最も高い大分県（38.5%）と3番目の熊本県（7.3%）では、専門農協がそれぞれ県内の集荷・販売シェアの50.2%、58.8%を占めている。以下では、そのなかでも日本有数の集荷・販売シェアを持つ大分県椎茸農協について紹介したい。

第1表 乾しいたけの出荷販売実績（全国、08年度）
（単位 トン、%）

		出荷・販売量	割合
農協		1,895	50.1
	専門農協	965	25.5
	一般農協連	619	16.4
	農協	311	8.2
森林組合		311	8.2
	森連	217	5.7
	森組	93	2.5
出荷業者		764	20.2
生産者組合		14	0.4
個人出荷		562	14.8
その他		239	6.3
計		3,784	100.0

資料 第1図に同じ

3 大分県椎茸農協

大分県椎茸農業協同組合は乾しいたけの専門農協である。08年度の組合員数は3,945人で、乾しいたけ販売額は約33億円となっている。販売事業以外にも種駒等の購買、原木調達資金の組合員への貸付等も事業として実施されている。

大分県は、同農協と同農協組合員の活躍により全国乾椎茸品評会で全57回中43回もの団体優勝を重ねている。しかし、同農協では現状に安住せず、輸入品との競合においては乾しいたけの品質向上による差別化が重要であると、組合員への支援を続けている。これは、品評会入賞者が特定組合員に偏っている現状に鑑み、組合員全体の栽培技術の高位均質化を図るため、品質向上へ向けて活動する複数の研究グループへ資金支援を行う取組みである。グループの活動内容は、技術水準の高い地域への視察や生産者同士の栽培研究、品評会入賞の熟練生産者から若手への技術の継承等である。この活動の結果、研究グループに属す組合員の品質は向上しているという。そして、この活動により若手生産者が育つことで、農協は一定品質の生産物を安定して集荷・販売できることとなる。

4 おわりに

国内産乾しいたけは、無肥料・無農薬で栽培される自然食品であり、食品の安全性や健康志向の高まりのなかで一定の需要は見込まれる。しかし、輸入乾しいたけの動向は無視できず、経営規模の拡大や栽培技術の高位均質化への努力等が必要となっており、農協のかかわり方の一例として、本稿で取り上げた専門農協のような取組みが求められていると考える。

（わかばやし たかし）